58

北清事変期の広島陸軍予備病院における外国人傷病者の医療と看護

隅田　寛[1)]，岡本　裕子[2)]，坂村　八恵[2)]，千田　武志[3)]

[1)]広島国際大学保健医療学部診療放射線学科，[2)]広島国際大学看護学部看護学科
[3)]広島国際大学医療福祉学部医療経営学科

1900年に北清事変が勃発すると，陸軍は広島に予備病院を開設し，傷病者の受け入れ準備を整えた．一方，海軍大臣は現地に対して各国の傷病者も収容するように通達した．これを受けてフランスは，自国傷病兵の広島陸軍予備病院への受け入れを要請した．陸軍大臣は，第5師団に対して外国人傷病者の受け入れを命令するとともに，日本赤十字社の外国兵専用救護班の受け入れを決定，また，三等軍医正芳賀榮次郎らを同病院に派遣し，万全の受け入れ体制をととのえた．本報告では，広島陸軍予備病院に入院したフランス兵傷病者の医療と看護について具体的に分析し，フランス兵入院患者に対する処遇の特色を明らかにする．

7月18日に博愛丸によって，フランス傷病兵第一陣41名が日本に向けて搬送された．このうち，4名は航送中に死亡した．7月からの3ヶ月間に日本に搬送された将兵と，広島で発病した1名を加え，広島陸軍予備病院に入院した外国人傷病兵は122名であった．なお，このうちフランス兵は120名で，うち1名はベトナム人となっている．

広島陸軍予備病院では，計295の手術のうち40が外国人傷病兵に対して行われた．同病院に入院した外国兵の戦傷総計は62であった．日本兵入院患者に対して行われた255の手術のうち戦傷に関する手術数は187であると推定される．同病院に入院した日本兵の戦傷総計は1,000程度であるので，外国兵士の手術割合が高いことがわかる．同病院における戦傷による死亡者はフランス兵2，日本兵17であり，外科的な治療は高い水準にあったと思われる．一方，総計7,919の病者のうち，脚気はすべて日本兵であり実にその数は1,693を数え，そのうち50名が死亡している．また，赤痢は944であり，フランス兵を含めて72名が死亡している．

広島陸軍予備病院の医療行為では，X線診断が使用されたことが特筆される．1895年にX線が発表されてから，ドイツにおいてX線は急速に医療に応用されるようになっていた．芳賀榮次郎は，ドイツへの医務視察を命ぜられた際，X線装置を私費で購入し，帰国と共に日本に輸入した．1899年の段階で，少なくとも3台のX線装置が各地の衛戍病院に配置されており，そのうちの1台は広島衛戍病院にあった．また，北清事変にともない新式の装置が補充された．そのため，広島陸軍予備病院では，入院患者に対して289枚のX線写真が撮影された．手術数と比較すると，ほとんどの手術例に適用されたと考えられる．

外国兵傷病者に対しては，看護においても特別な取り計らいがなされた．トイレの改装，新規寝具の購入や，食事のためにもナイフ，フォーク，葡萄酒グラスなどが相当数用意された．外国人傷病兵の看護にあたった日赤救護班の看護婦は常に親切で，あたかも慈母がわが子に接するごとくであったと評価され，退院の際にはフランス兵傷病兵の多くが感謝の辞を残している．また，傷病兵の回復の重要条件である栄養管理についてみると，佐尉官一日2円，下士卒一日1円の高価な予算で献立表が作成された．また，飲料として葡萄酒が提供された．日本兵の場合は現品支給で，重傷者への嗜好品や滋養品の配布はできない等，外国兵に相当気を遣ったことがわかる．

広島陸軍予備病院に入院したフランス兵傷病者のうち，結果的に5名が死亡した．フランス人宣教師が葬儀を執り行い，遺体は比治山の陸軍墓地に埋葬した．こうした死後の手厚い取り扱いについてもフランス側から感謝の言葉が述べられている．

以上から，広島陸軍予備病院ではフランス傷病兵に対して破格の待遇で接していたことがわかる．なお，このことは，当時の日本が国際社会における立場の向上をめざした結果行われたと考えられる．